

## 阿波からの来訪者

－酒井弥蔵の旅日記『出向かふ雲の花の旅』から

旅が盛んになった江戸時代中期以後、全国から多くの人びとが厳島を訪れた。芭蕉を師と仰ぎ、俳諧と旅を好んだ阿波国半田の酒井弥蔵<文化5～明治25年(1808－1892)>もそのひとりである。藍などを栽培して農業経営する傍ら、出張代行業などを営んだ。俳号を春耕園農圃といい、いくつもの旅日記を残している。その弥蔵が厳島に立ち寄ったのは杵築神社(出雲大社)参詣の途上である。『出向かふ雲の花の旅』(徳島県立文書館所蔵<サカイ 00086000>)には、旅程や滞在先での感動が句や歌とともに生き生きと綴られている。

旅立ちは嘉応2年(1849)3月11日のこととされる。金比羅宮を経て多度津から瀬戸内海を渡って鞆に上陸、阿伏兎観音を見て尾道へ。寺廻りと点在する芭蕉塚を訪れながら三ツ口に到着した後、黒瀬の津江、熊野を経由して矢野から船で宮島に渡っている。眺めた船は船津屋、宿は大坂屋であった。

翌朝の参詣は大鳥居から。千畳敷を見て廻廊に入り、客人社、御本社を拝したあと大願寺を経て大元まで行き、神社の裏まで引き返して弥山に登ったという。白糸の滝、滝宮、眼洗薬師、三鬼神社などの名が見える。折しも桃花祭の最中で下山後はしばらく能と舞楽を見物。絵図2枚と楊枝百本を土産に買い、その日のうちに広島城下へ。潮の都合で江波で下船、塚本町の宿に入っている。ずいぶん駆け足のようだが、現代の観光ルートとほぼ一致していることがわかる。翌日は、ここまで来て錦帯橋を見逃すのは惜しいと、城下見物を楽しむ仲間と一時別行動。途中、地御前から再び厳島を眺めている。

弥蔵が求めた絵図のうち1枚は「安芸國厳島社頭圖」。現在も徳島県立文書館に所蔵されている。記された名所との一致度が高く、旅の記をまとめるに際してこれを参照したと推測できる。安政3年(1856)になって書写したいと思しい『伊都伎島由来』など、関連資料も併せて所蔵されている。

農閑期に思いを馳せて情報を集め、旅を満喫して帰宅した後、あるいはずっと後になって記録と記憶と絵図で旅日記を綴る。このような営みをする風流人は各地にいた。歴史に名を残した人物ではなく、各地の名もなき風流人の手になる資料や記録から庶民の旅の様相や時代の様相を垣間見ることができそうである。これらの資料には創作的色合いの濃い記事も見受けられ、虚実ない交ぜであるが、そこになにがしかの真実が宿っているのも確かであろう。

たとえば、行程に見られる疑問をひとつ。一行はなぜ三ツ口から二里を歩いて黒瀬

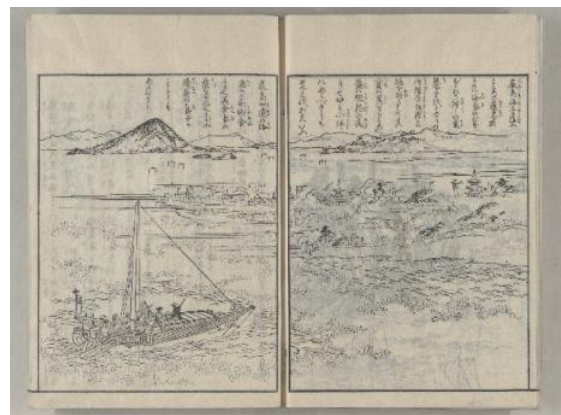
に向かったのか。熊野あたりの名所を見たとはいえ、どう考えてもこの一泊は回り道である。

実は津江には代々俳諧に親しんだ豪農がいた。その地の同好の士を訪れたのではなかったか。芭蕉を慕う風流人は全国にいる。没後、節目を迎える度に各地に作られた芭蕉塚を訪ねて先人を思い、同好の士と句を詠み交わし、親交を深めたのではなかったか。それも旅の目的、楽しみであろう。どこまでが事実でどこからが虚構なのか。旅日記をまとめた目的はなにか。未だ推測の域を出ないことも少なくない。ひとつひとつ資料を掘り起こして、丁寧に読み、情報をつきあわせることによって浮かび上がってくる人々の営みがありそうである。

最後に巖島での農圃の詠を紹介しておこう。

「極楽も今や  
弥山の花盛り」

「蛤の夢にはあらで  
いつくしまけふぞ  
霞のけしき見し哉」



『安芸巖島図会』巻三（宮島学センター蔵）

（西本 寮子）

（「宮島学センター通信」第12号・2021年3月）